

社会福祉のイメージ — 喝采を受けつつ否定されている領域 —

中 原 淳 一

目 次

- ・ 問題意識の経緯
- ・ 社会福祉関連事項のイメージ調査の概要
- ・ 調査結果の主成分分析
- ・ 用語（スティグマ）の過剰使用
- ・ スティグマと進化心理学

I 問題意識の経緯

ある人が、彼の身の周りの多くの人々や物事を否定的に捉えそれらを嫌悪しているとしたら、彼の今の心理が否定的なもので満たされている可能性が高いだろう。またそのことがある程度持続するなら、彼の人格特性が人物や物事を否定的に受け止める傾向の強い権威主義的なものである可能性も高いだろう。ある時代のある特定社会が、多くのそうした権威主義的な人物で構成されているとしたら、人々の人格の主要部分は権威主義的な社会的性格と呼べるものだろうし、その社会で注目される多くの事柄は、否定と否定の接触から生ずる否定の冪乗とでも言うべき過熱した否定的側面を持つようになり、それは現今の日本社会でのように事故や事件やさまざまな形態での犯罪として頻出することになるだろう。

筆者はすでに同じ趣旨のことを前稿⁽¹⁾で「我々の社会は暴力的な様相を呈し始めているのではないか」として表明した。そのことを、現在の日本人の社会的性格を“権威主義的なもの”として捉えることと関連させて論じてみたのだった。

こうした問題意識は、筆者が現代青年が

“環境問題関連事項”について持っているイメージについて調査を始めたことに由来している。「環境」問題への最初の心理学的切り口として、「環境問題に関連する諸概念」について現代の青年たちが抱いているイメージを、Osgood による SD 法^(7,8)によって調べはじめたのだが、そこでの主要な知見は当時の筆者には思いもよらないものだった。

「産業廃棄物処理施設」「原子力発電所」「病院」「老人」「大型トラック」「難民」「森林」「河川」「水田」「牧場」「地球」「コンピュータ」「生態系」「農業」等の各用語のイメージを尋ね、これらの用語の集合が示すと思われる内包的意味を（因子分析の手法によるという限定的なものではあるが）探索したところ、第1因子として得られたものは「醜い、濁った、悪い、不健康な、腐った」ものという意味をしめすものであり、第2因子は「古い、消極的、ぼんやり」という意味の要因であり、第3因子が「重い、現実的、強い」という意味の要因であった。振り返ってみれば、現代という時代が示す様々な事象と関連させれば随分と解釈のしやすい因子が得られていると思われるが、調査に使用された用語を取り纏めて集合と看做したときに、そのまとまりの内包的な意味が、先ず「醜く、濁って、不健康で、暗い」というのは、現代が私に突き刺さったようにも感じられて衝撃的でさえあった。

しかしこの結果は、同時に私にいくつかの疑念をも生じさせた。この調査で示された「現代の暗さ」と私が感ずるほどの「強い否定性」は、調査に使用された刺激語の範囲を

超えて現在の日常での一般性を持つものなのだろうか？ さらにもっと深刻であったのは、この結果はじつは方法（特に評定尺度の構成）に由来するアーティファクトではないのか？ということであった。

結果に対するこうした思い入れから、引き続きほとんど同様の方法（前回の調査で因子負荷量が極めて小さかった尺度を1つ減じた）で、次の10語についての調査を行った。

「遺伝子操作技術」「携帯電話」「二世（ジュニア）の人々」「少年」「ヴェンチャー企業」「高齢者」「産業廃棄物処理施設」「森林」「介護ロボット」「社会福祉」。このうち「森林」「産業廃棄物処理施設」の刺激語は前回も用いているが、再び用いて前回調査との異同を検討する材料にした。また「老人」の呼称を「高齢者」に変えたが両者はかなり近い用語とみなすことができる。

結果はすでに報告⁽⁴⁾してあるので詳細は述べないが、第1因子と正の負荷量が高い尺度の、正の側の形容詞は「不健康な、暗い、危険な、濁った、」であり、一方、第1因子に負の負荷量があり、その絶対値が大きい尺度での負の側の形容詞をつなげると「不安定な、硬い、冷たい、醜い」であった。つまり第1因子の内容は「暗く濁って危険で不健康で、硬く冷たく醜く不安定なもの」であった。つまり前回の調査とまったく同じように、寄与率も非常に大きい第1因子が得られたのである。第2因子は「鈍い、遅い、夢のよう」なものであって、これは前調査とは異なっていた。イメージ調査の対象はいくつかの刺激語の集合であるが、二度の調査でのそれは重複している部分もあるが、またかなり異なっている。その食い違いは第2因子には現れていると思われるが、第1因子は、いずれの集合についても同じ「強い否定性」であった。インフォーマントは、何れの調査においても「外部世界を強力に否定する者」として現れているように思われた。自らの周辺を「否定的に…」捉

えがちな人物は、たとえば社会福祉に関連する事象や人物をも「否定的に…」捕らえる可能性が高いであろう。周囲の人物には勿論クライアントも含まれる。ある社会の多くの人々が、社会福祉の事業に携わる人々やこの諸事業でのクライアントを概ね否定的に捉えているとしたら、その社会において「福祉の名で諸事業を行う…」ということは、そもそも一体何事の成就を願っていることなのだろうか？ この調査では、そんな予感もあって刺戟語として「社会福祉」を含めておいた。先の報告⁽⁴⁾ではこの刺激語については特に言及はしなかったが、あらためて刺激語「社会福祉」を見てみよう。

刺激語「社会福祉」の場合、全20尺度での評定の平均値は3.67であった。尺度3, 8, 9, 12, 13, 20などが平均より大きい評定値を示す尺度になっている。これらの尺度の、反応平均値の大きい側に位置している形容詞を並べると「熱い、新しい、ぼんやり、美しい、遅い、静かな」となる。ここには否定性の強い形容詞は一つもない。“遅い”がある種の否定性を示すと感ずるのは、日本という競争社会の「文化」に我々も浸っている証拠だろう。“遅い”それ自体は否定ではない。全尺度の相関行列データに基づく因子分析では、第一因子が圧倒的な寄与率を示して、その内容は「否定性」と解釈できたが、「社会福祉」単独のプロフィールに現れているものは、因子分析の結果とは見かけの上で大きく異なっていた。

ただし、こうした相違が出ることでそれ自体には、なんら不穏当なところはない。因子分析の手法とは、変量間の相関行列を、各変量に相応の負荷を持った仮説的な新変量を想定するモデルによって、観測したデータを再現できるようにすることなのであるから、評定反応をそのまま並べただけのプロフィールと、統計数理モデルによる全体の再編成とが見かけの上で違っていても、何かまったくデータに無いものが出現したわけではない。そうで

はなくて、私がある穏やかでないものを感じるのは「社会福祉」のプロフィールの内容からなのである。「社会福祉」という言葉の持つイメージを意図的に分解してみて、それを例えば「美しい……醜い」という連続体上に位置づけることを求められれば、多くの人が「美しい…」に寄ったほうにその位置を定める。「熱い……冷たい」の連続体上では「熱い…」のほうに寄る。かくして「社会福祉」プロフィールの denotation は、やや脚色して言えば、「静かで、ゆっくりと遅く、ぼんやりして薄明のようであり、しかし、それは熱く、美しく、そう捉えることは、新しい」とでもいうことになる。「社会福祉」に関するさまざまな事柄は文化的・原則的には positive なことなのであり、そのことの denotation が上のように表現されているときに、それに異を唱えることは多くの人にとっては困難なことになる。したがって「社会福祉」について評定せよと求められれば、人は上のように答えるのであろう。しかしそこにはタテマエがもっている、ある「見せ掛け」が滲出しているようでもある。

私が差し当たり「不穏当な感覚…」としておいたことと類似の感覚だと思うが、小浜逸郎氏は著書⁽⁹⁾の中で「違和感」としてそのことを「拍手」や「ことさらな言挙げ」を例にしながら述べている。彼の文章を引用してみよう。“知恵遅れの子供たちが（その辺の普通の子供たちと）一緒に徒競争に参加して……最後にひとり悠々とゴールインすると、見ている親たちの間からどこからともなく「拍手」が沸き起こる… 障害者が困難を乗り越えて何かを獲得したときマスコミがことさらに取り上げる…” というような事実の背景にある普通の人たちの側の屈折した心理を、彼は「情緒のファシズム」と呼び、そのことに「違和感」を感じ、これらの力動を「ことさらな賛美の力学」として、その機能についてさらに次のように書いている。“…こうすることは

一見弱者の実存に温かく寄り添っているように見えて、じつは逆に「弱者」という社会的なスティグマ（聖痕）を彼らに刻みつけ、健全者との集団的境界線を不必要に強く引く働き…”があるのではないのかと。小浜氏のこの文章は、私の意見と同方向のものであり賛同するところが多いのであるが、私はこの文脈の中にスティグマの用語を使うことには同意できないのである。彼の論述では、「賛美することがスティグマ（聖痕）を与える」という結論が先にあって、何故そのような経過をたどるのかについての論述が乏しいように思えるし、更に言えば、社会福祉の領域で、研究者たちがスティグマの用語を頻繁に使うことには同意できないのである。この用語を使う事で、研究者たちが実は「殊更な言挙げ」をして、actual には微かな境界を virtual には深いものにしているのではないのかと感じている。

私は、ある種の賛美を胡散臭いと感じそれには違和感を覚えるということは、“賛美する行為が贗物であると感じ、それが何かの防衛であると感じ、防衛であるとは、賛美する人には実は賛美する対象を否定し遠ざけようとする動機があり、その動機は現代日本社会の建前によって表向きは非難され攻撃される可能性のある動機であり、したがって抑圧し防衛する必要がある”のではと感じている。普通の人が弱者を賛美することは、「弱者に優しく…」という現代日本社会で今や建前制的になってしまっているスローガンに賛同していることを一般社会へ向けて表明していることであり、それを防衛機制に基づく防衛行動であると解することで全体の枠組みを理解できるのではと感じている。それが防衛行動であれば、あからさまに表明することが憚られる動機があるはずで、ある領域のある対象をことさらに賛美する行動は、それが向けられている対象について、実はその対象を「否定したり排除しようとする動機」を基盤にする防

衛機制に基づくものと解することで全体の整合性が取れるように思われるのである。そしてその対象とはこれまでの議論から明らかに、いわゆる「弱者」、「社会福祉の領域における事象とそれに関連する人々、特にクライアント」ではないのかと思われる。

Ⅱ 社会福祉関連事項のイメージ調査の概要

この章では、社会福祉に関連している幾つかの事項についてのイメージ調査の概要を述べる。調査は上記のような問題意識に立ったもので、2001年10月12日に筆者と森田氏によって、北海道浅井学園大学の学生101名をインフォーマントにして実施されたものである。また森田氏はこの調査をもとにして、北星学園大学社会福祉学部2001年度の卒業論文を書いている⁽⁵⁾。

調査実施上の詳しい手続きについては(1, 2, 3)と同様であり、それを参照していただくことにして、今回はそこでの問題意識を延長して刺激語群を大幅に変え、評定尺度もそれに合わせて一部分変更したので、それら変更部分について記述する。調査は、基本的にはオスグッドによる意味微分法 (semantic differential method) の方法をそのまま適用したものであり、同工異曲の調査をこれまでも数多く報告しているので、詳細については上記の諸論文を参考にさせていただく。

刺激語として、そのイメージを尋ねたのは次の13語である。

1. 「生きがい」 2. 「手話」 3. 「育児休業」
4. 「ホームヘルパー」 5. 「ボランティア」
6. 「社会保障」 7. 「施設」 8. 「車いす」
9. 「寝たきり」 10. 「生活保護」 11. 「高齢化」
12. 「基本的人権」 13. 「介護保険制度」

この13語を、以下の16の評定尺度で評定することをインフォーマントに求めた。各尺度は表1に示したように、対になっている形容

詞を両端に配して尺度の内容を示し、距離を等間隔に刻まれた7段階として示すことで、反応を間隔尺度上で直接に捉えていると考量することになっている。

表 1

1. 不安定な	安定した
2. 硬い	軟らかい
3. 健康な	不健康な
4. 重い	軽い
5. 弱い	強い
6. 古い	新しい
7. するどい	にぶい
8. 醜い	美しい
9. 速い	遅い
10. 良い	悪い
11. 現実的	夢のよう
12. 動いている	止まっている
13. 明るい	暗い
14. 澄んだ...	濁った
15. 騒がしい...	静かな
16. 積極的な	消極的な

筆者はこれまでは20あるいは21の評定尺度群を用いていたが、森田氏と協議の結果、そこから幾つかの尺度を外して16尺度の評定尺度群とした。内容的には今までに筆者が用いてきたものとほぼ同様であるが、評定する尺度数を少なくして出来るだけインフォーマントの負担を軽減しようとしたのが大きな理由である。削除にあたっては、今までの調査で因子負荷量の絶対値が小さかったこと等を参考にした。

刺激語が所属する領域を主として「社会福祉」関連の領域にしたこと、評定尺度数16と小さくしたこと以外は、今回の調査も以前と同様に行ったので、細目については記述せず直ちに結果を報告する。

Ⅲ. 調査結果の主成分分析

筆者は、結果の分析にこれまでは因子分析法を用いていたが、今回は主成分分析を行う。何故そうするかと云えば、主成分分析の場合、研究者の側で裁量する余地のないことが、今回のような問題の場合、因子軸の回転法を選んだり因子数を決めたりすることで多少とも主張に都合のいい結果を導く可能性があるのをストップする意図があつてのことだといえる。また SD 法を利用する場合には、3 相データが得られるように計画する場合が多いが、3 相データの場合には刺激語を変数と見た場合と尺度を変数と見た場合の 2 様の相関行列が得られる。さらに相関係数算出のための分散の基盤を、個別の被験者間に求める場合と、被験者間の平均値を使って変数間や刺激語間に分散の基盤を求める場合とがある。データをどのように整理して分析に委ねるかは、何を問題にしているのかによるであろう。いずれにしても分散をどこに求めるかは重大な問題で、結果に大きな相違をもたらす場合もある。我々は相関係数算出のための分散の基盤を常に被験者間に求めることにする。観測値、つまり被験者数は 101 である。また主成分分析は、尺度間の相関行列に対して実施した場合の結果のみを報告するが、刺激語の内包的意味を問題にするのであるから、内包的意味を「諸成分に分解している」と一応は想定できる尺度を変数にとるのは妥当であろう。分析の実行は SAS ではなく、マイクロソフト・エクセルのアドインソフトであるエクセル統計によった。固有値は 16 個得られるが、上位 4 個の値と寄与率、累積寄与率を記す。

固有値表

	固有値	寄与率	累積寄与率
1.	6.1207	38.25%	38.25%
2.	2.1635	13.52%	51.78%
3.	1.4948	9.34%	61.12%
4.	1.0429	6.52%	67.64%

第 1 主成分に対応する固有値の寄与率は、上に見るように 38.25% であるが、相関行列の対角項に共通性の推定値（さまざまな推定法があるが）を入れて相関行列の固有値を求めると、第 1 主成分の寄与率は 62% にもなる。因子分析がかなりモデルに左右される方法であることを垣間見せている。次に固有ベクトルの第 4 主成分までの値を記す。

固有ベクトル

尺度	成分 1	成分 2	成分 3	成分 4
1.	-0.2055	0.3358	0.2653	0.3676
2.	-0.1091	0.4789	0.1307	0.1060
3.	0.2525	0.0265	0.1676	-0.1651
4.	-0.0339	0.5716	0.0069	-0.2216
5.	-0.2499	0.2647	0.0816	0.4211
6.	-0.2339	0.0131	-0.2231	-0.1286
7.	0.2423	0.1147	0.4864	-0.1756
8.	-0.2867	0.0217	0.2509	-0.2673
9.	0.2813	-0.0166	0.3040	0.1061
10.	0.3146	0.1469	-0.2363	-0.1173
11.	0.1791	0.3500	-0.3097	-0.2564
12.	0.3142	0.2225	-0.1072	0.0862
13.	0.3156	-0.0558	-0.1410	0.4314
14.	0.3054	0.0101	-0.0549	0.3959
15.	0.1728	-0.1529	0.4995	-0.0784
16.	0.3015	0.1606	0.0062	-0.1831

第 1 主成分は尺度 2, 4, 11, 15 を除いた他の尺度に多寡の差はあるがどれにも万遍なく含まれている。つまりこの成分は「社会福祉関連領域」の事物や人物のイメージを評定するに当たっては、無意識的に或いは意識的に

も第1義的に参照される重要な評価次元ということになるだろう。そしてその次元が表そうとしている変量の意味は、固有ベクトルで特に重みの大きい要素(重みはすべて正值であった)を持っている尺度、尺度13, 10, 12, 14の内容が指示しているはずである。これらの尺度のプラスの側(平均を0点として)の形容詞は「暗い, 悪い, 止まっている, 濁った」である。さらにそれに続いて「消極的な, 醜い…」と続く。このように第1主成分は再び強烈な「否定性」として出現してきた。第2主成分について要約的に簡単に記すと, 「軽い, 軟らかい」である。第3主成分以下は省略する。

われわれは、この領域のイメージが明るく健康的で伸びやかなものであると考えてはいなかった。それが「暗さや消極性や不健康さ」を示すものであろうと予想はしていた。しかしこれほどの否定性が示されるとは思ってもいかなかった。事実、各インフォーマントの各刺激語に対する各尺度での直接の反応を、インフォーマントをツブシて平均値をもとめ、各刺激語ごとにプロフィールを描くと、直接的な反応にはそれほどの否定性が示されているとは感じられないのである。各プロフィールごとに平均値からの隔たりをみると、「介護保険制度」では“遅い, 重い, 新しい”, 「寝たきり」では“弱い, 不安定な, 重い”, 「生活保護」では“弱い, 重い, 暗い”と否定性を示す言葉が上位に来る。その一方「手話」では“静かな, 良い, 美しい”, 「基本的人権」では“重い, 良い, 強い”と「肯定性」を示す言葉も並ぶ。確かに「寝たきり」「生活保護」「高齢化」等の刺激語では、各尺度の中央値である4よりは否定的な方向へ反応はずれる。しかし極端というわけではない。またプロフィールで見る限り「手話」「生きがい」「ボランティア」のイメージは躍動感のある肯定的なものになっている。つまり、直接の反応はそんなに極端に否定的には見え

ないのである。

しかし、人が刺激語に否定的に反応したとき、見かけの反応がそれほど極端でなければ反応した人は「これは許容範囲だ!」と意識するかもしれない。しかし深層には「許容範囲」には収まらない敵意や攻撃性や侮蔑感が巣くっている場合があるかもしれない。このとき人は防衛反応を必要とするだろう。今われわれが調べている問題もそれに相当するのかもしれない。もとより因子分析や主成分分析は深層心理を調べる方法ではない。それは、数字データとして観測したものを数理モデルに従って再構成するだけのことであり、ないものを取り出してくる訳ではない。しかしデータが多量であって、そのことが人間の直接的な認識力の及ぶ範囲を大きく超えるとき、数理モデルによるデータ構造の認識は大きな助けになる。個人ではおぼろげながらにしか感じていないある違和感や排除感、それは微かなものであり些細なものであるとも感じているそれ。しかし多数の人間がその表出を繰り返して行うことを求められると、それら多数の人間の違和感・排除感が、まるで「廃棄物処理場」に集積されるゴミのように次第に圧倒的な量として集積されていき、「社会福祉の関連領域」を外側から評価する人間の心理の本質がそこに出現するのかもしれない。

ところで、私が再々疑念を持ったように、これがアーティファクトである可能性があるようにも思える。そのことを決定的にチェックするとしたら新しい調査が必要になるが、それに時間と労力を費やすことには気が進まないで、「否定性が強い」という感触が得られればよしとすることにして、現在のデータから人為的にある部分を取り除いて人工的なデータをつくり、それに分析を施してみることにした。

まず全16尺度のうち第1主成分にもっとも負荷量が大きい尺度13を残すことにして、尺度10(良い...悪いの尺度)外してみた。相關

行列の第1成分に対する固有値は5.5625, この成分へ正の負荷量が多いのは尺度13, 14, 12であり, 負は尺度8 (醜い...美しい尺度の醜い側) であった。第1成分は「否定性」と解しうる。更に尺度10に加えて尺度14も外すと, 第1成分の固有値は5.0328, 正の負荷量が多いのは尺度8, で負の負荷量が多いのは尺度16, 13であった。つまりひとつ前の処理とは負荷量の正負の符号が逆転するのである。実際のデータ処理の段階でこの値が得られたとすれば, 第1成分の内容を「否定性」と解することは到底できないだろうが, われわれの場合には尺度を外すということでデータを意図的に操作して「否定性」に関与していると思える分散を消してしまったのだから, この結果は当然でもある。このことは「否定性」を示しうる尺度が複数あれば, インフォーマントの反応は先ず「否定性」として現れるということであろう。インフォーマントは「否定性」ではなく「肯定性」を示すこともできたし, 中立でもありえたのである。同様のことを尺度10をのこすことにして行くと, 尺度13, 14のデータを外しても, 尺度10が第1成分に最も正の負荷量の大きい尺度, 尺度8が最も負の負荷量の大きい尺度として現れ, 尺度12, 13, 14と外してしまうと, 尺度10は依然として第1主成分に負荷量の一番大きい尺度ではあるが, 符号は逆転して負になる。第1主成分の内容は否定性ではなく「美しいもの...」という成分になる。以上のことから, 「社会福祉とその関連領域」に関わることを, 人々は「否定性」を示している領域にかかわることだ」として捉えているとする感触は, あまり無理のないものだと考えてよさそうである。

IV 用語（スティグマ）の過剰使用

「社会福祉の領域」の外側に位置する多くの人々が, この領域を否定的に捉えているな

らば, そのことにはどんな機能があるのだろうか。小浜氏は「ことさらに賞賛し賛美すること」にスティグマ (聖痕) 化の機能をみていた。(この意見に賛同し, それに触発されて言えば, 私は「否定し嫌悪する」ことにもやはりスティグマ化へと向かう機能があるのだろうかと考える。) 小浜氏は, スティグマの用語に (聖痕) の訳語を当てたが, この文脈では (烙印) のほうが良くあてはまるだろう。

周知のとおり stigma とは, 古代ギリシャにおいては罪人その他の好ましからざる人物の身体に刻された文字通りの「烙印」のことであったが, 中世ヨーロッパでキリスト教の影響の下で, それに (聖痕) の意味が付け加わったとされる。この (聖痕) の場合には, スティグマ化による差異化の作用は (烙印) の場合と同じように強いものだろうが, それが蔑視や拘束を導くものではなく, 聖化することによって対象は地上界をはなれて上昇するものとなり, 喜捨や貢ぎの対象へと神格化し, 時には統合の象徴として社会の中心に置かれる。我々はスタバート・マーテルのようになるだろう。しかし, わざとらしい賛美やことさらな言上げの機能は聖なる者として彼を見上げるのではなく, 「弱者としてスティグマ化すること」にあり, それによる線引きの強化であるとするならば, そこでのスティグマは「聖痕」の意味ではなく「烙印」でなければならないだろう。「ことさらな賛美」は, 見かけの上では「聖痕」の付与のように見えるかもしれないが, 真の意味は「烙印」の付与である。またこの文脈でスティグマの用語を使用することにどんな意味があるのだろうか。そもそもこの文脈でスティグマの用語を用いることに意義があるのだろうか。小浜氏の場合, スティグマの用語が物理的な刻印の意味で使われていないことは明白である。だとしたらそれに込められている概念とはどんなものだろうか。

古典的には stigma (烙印) の用語は, それ

が印されている人が奴隷、謀反人、犯罪者などであることを指示し、彼らが「公共の場に存在することは許されざる者」であることの告知印であったとされる。しかし物理的なスティグマ記号の刻印のようなことは、現代社会では考えられないことであり、この言葉を生かそうとするなら今日の概念規定が必要になるだろう。そのことは Goffman, E.⁽⁹⁾によって開始されたとされている。彼は virtual な社会的アイデンティティと actual な社会的アイデンティティとの特殊な乖離をスティグマと定義した。⁽¹⁰⁾特殊な乖離とは、彼の特別の属性によって、彼が「正常な人から穢れた卑小な人」へと貶められるような乖離である。彼は古典的なスティグマの概念も同じように持っていたに違いない社会関係についての機能概念を前面に押し出し、我々が持っているステレオタイプについての属性と、それと不調和になる属性を問題にしたのである。しかし彼はまた同時に、「本当に必要なのは属性についての言葉ではなく関係についての言葉なのだ」と述べている。この言葉を真っ直ぐにそのまま受け取れば、「彼 (Goffman) は貶められた社会的同一性を、スティグマの用語でさまざまに語ったが、実はそうした社会的同一性を表現する別の用語が欲しかったのだ」と言えるのではないだろうか。しかし彼はこの用語に代わりうる、しかもこれと同様にインパクトの強い言葉を作り出すことが出来なかったのだ。

このような Goffman の精緻な概念規定とは別に、それ以前から多くの領域で stigma の用語が明確な概念規定なしに使われていたようである。たとえば社会福祉の領域においては、福祉政策が対象者を選別する場合の手法が、クライアントを差別化し社会的アイデンティティの低下を意識させる可能性をめぐっての論議にスティグマの概念が有効であったとされている。ピンカー R.⁽¹¹⁾は、“...スティグマを与えることのない福祉供給の方策を編み出すこと...

それが経験される理由...それを生み出す供給と利用の条件について深い理解を得ること”と書いている。確かに福祉政策の受給による社会的同一性の低下を嫌って、受給を拒否する人がいるという。この拒否をピンカーは“スティグマ化されることへの拒否”と理論化しているが、そのことは妥当であろうか。社会的同一性の低下はさまざまな事柄で生起するであろう。そのことの全てがスティグマ化でないことは無論のこと、その大部分がスティグマ化ではないと思う。激烈で極端な社会的同一性低下のケース以外には、この同一性低下をスティグマ化と呼ぶことは不適当だと私には思えるし、福祉政策がそのような同一性低下をもたらすのであれば、それは福祉に名を借りた何か別のもの、シャワー室から毒ガスが出てくるに等しいものであるはずだろう。

スティグマの用語には、古典ギリシャ以来の奴隷、犯罪者、無頼の意味がついてまわり、現代に流通しているスティグマ概念にも無論それは言外の意味として、connotation として込められている。福祉政策による受給を拒否するのは、受給することによって奴隷化されるという意識を持ったり、擬似犯罪者化されたという微かな意識を持つことを拒否することによるのかもしれない。階層化が明確な社会では、福祉サービスを受けることは階層の階段を下りることと同義であるかもしれないから、ある社会で、当然のようにしてこの用語が使用されることは、その社会がスティグマの用語を使用して当然なぐらい、いまだに階層化され、階級が明確に機能している中世的社会であることを示しているのではなかろうか。いずれにせよクライアントが自らの意志で拒否できる事象に、スティグマ化の概念を使うことが妥当であるとは思わない。またこの概念を、人生での如何ともなしたい不運の運命や個人に対しては圧倒的な強制力をもっている体制 (例えば国家) の側からの、個人に対する安易な否定的社会的同一性付与

の事象にも、使うべきではなかろう。

ある人が“社会規範が期待 (expectation) するものを失意のうちにしか受け止められない人々、「期待」を実現できず、そのことに打ちのめされている人々は stigmatized である”と書いたら、それはそういうことがあるかもしれない場合についての言説である。しかし、社会的な期待に副えない例として、「10人中9人が成功しているときに失敗した1人には重い stigma が罹る」と述べれば、それを受当な言説と受け取るわけにはいかない。確かに stigma は「ある意味で」大きな失敗を持続的に経験している少数派に適用される概念ではあるが、失敗にもいろいろあるのだから、このように数量的な基準でスティグマ概念を使用することは、例としては甚だ不適切になるだろう。この用語を安易に多用することについては、小浜氏の言う“ことさらな言挙げ”を援用して“ことさらな言下げ”とでも言っておきたい。我々は Goffman の指摘のとおり“社会的諸関係のうちで、不当にも深く傷ついている社会的同一性をあらわす「言葉」”が必要なのである。stigma や social stigma の用語は、斯学が言葉足らずの現況であるが故の、古代からの拝借物であると理解すべきである。

さて stigma 化のプロセスによって社会的に排除されやすい属性としては、Kurzban & Leary⁽¹³⁾が精神病、精神遅滞、肥満者、同性愛者、疥癬患者、癩癰患者、HIV/AIDS 患者、がん患者、各種の人種、少数民族、宗教集団などをあげているが、ここには福祉サービスのクライアントになることが予想される人々が多く含まれている。また Jhon Baldock⁽¹⁴⁾その他によると、Spicker P.⁽¹⁵⁾は、人間がスティグマ化される条件として (1. 貧困と社会的排除からの発生, 2. 身体的な能力と疾病が導くもの, 3. 精神疾患や薬物常用癖, 4. 犯罪行動のような道徳上のスティグマ, 5. 福祉サービスに依存することから発生するもの) の5条件を挙げているとされているが、ここには社会福祉とその関連領域はスティグマ化されるものであるとの認識が示されている。このことは我々の調査と分析で強い「否定性」として示されているものと類似した認識がしめされている。しかし我々はこの「否定性」を、今のところは“この国では人々が社会福祉領域をスティグマ化して捉えている”と認識できる状況にはないと思っている。ただこの「否定性」は、事柄のスティグマ化と近縁のカテゴリーに属し、この国のこれからの社会体制・社会政策・文化的状況の過程如何によっては、人々がこの領域を deeply discrediting な領域と見なす可能性もある。社会福祉およびその関連領域とは直接の関わりを持たない人々が、この領域を“ある種スティグマ的に認識している”という現在での事態の把握は、そんなに的外れのものではないだろう。

Stigma 或いはは social stigma の概念は今のところ“特定の社会的文脈で「平価が切り下げられた」社会的アイデンティティを示すような属性を持つことの機能”として理解されている^(16,17)。つまり聖痕や烙印といった物理的刻印というよりは、刻印はないけれどもそれがあるのとほぼ同様の機能を示すようになってしまった社会的同一性、その同一性による社会心理力動とその結果を指す、として理解される。社会心理学の領域でスティグマの概念を使おうとすれば、このように社会と個人を結ぶ社会的同一性の概念で締めくくるのは当然でもあるが、人格の平価が切り下げられた場合には、個人の心理としての「不安と恥辱の感覚」とそれを超越することによって獲得されるかもしれない同じ人物の「選ばれていることの恍惚感」の双方を含みうるものになりうるから2面的・多面的であって、ストーリーを語る概念としては有用だろうが、これを操作的にして説明概念に造り上げるのは困難なことになるだろう。スティグマ的なもの

のが発生しうる領域とそこでの問題の多様性をこの用語で一括してみても、個々の具体例では分析が拡散して、見通しの良い理解が可能になるとは思えない。我々の調査・分析においても、「社会福祉関連領域はスティグマ化される可能性のある領域である」との理解でとどめておこう。

それでは他者に心理・社会的に「烙印」を刻することの機能は何であろうか？それは「侮蔑」から「差別」「排除」へといたる過程の正当化であろう。人は正しい行為をしなければならないと感じているが、他者を侮蔑したり排斥したりすることが正しい行為であり、現在それをなしつつある自分が「正しい人」であると納得するのは容易ではない。しかし他者のステロタイプ化した把握やそれに基づく偏見はこの過程を楽にしてくれるだろう。そればかりか、その他者に「(罪びと)の烙印」が刻されているということになれば、「差別や排斥は社会が求める規範的なものだ」という認識が生まれて、彼は高揚した気分になるのかもしれない。

V. スティグマと進化心理学

人々が、あるカテゴリーの人をスティグマ化して排除するに関しては、そのことに進化的な起源があるという議論がある。⁽¹³⁾ 自然選択の結果、貧弱な社会的交換のパートナーを避けるようにすることが、認知的適応のシステムとして人間に備わってきたとする説である。

人間の身体が遺伝の産物であること、それがつまりは永い進化の過程の今の到達点であることを疑う人はもういないだろう。ローマ法王庁も進化が科学的事実であることを認めるにいった。手足や内臓が進化の産物であるのと同じように、頭蓋に収められている身体器官としての脳も進化の産物であるし、その脳の機能がさまざまな心理を生み出すのであるから、人間の心理もその一部は進化の産

物として理解できるだろうということになる。このことが中味のない単なる言葉の上のことではなくて、それを現実化できる方策があれば事態は進む。現状はそうになり進化心理学が生まれ発展しつつある。^(18,19)

この進化心理学を支えている進化生物学の基本的な原理は“適応 (adaptation)”である。これもまた単に適応と言っているだけでは、それは抽象的で漠然としている概念だが、進化生物学者は何が適応かを詰めていくことで、適応度 (fitness or Darwin fitness) という具体的な概念にまで到達し、適応の概念は操作的・道具的なものとして使えるものとなった。社会生物学者 Wilson E. ⁽²⁰⁾によれば、ハミルトンの包括適応度 (inclusive fitness) の概念は、ダーウィン以来の難問だった利他行動の説明に成功し、自然選択の概念で多くの行動型を把握する道を開き、また他方では Maynard = Smith J. ⁽²¹⁾が、適応度をゲーム理論における利得行列に埋め込むことで、行動型を“進化的に安定な戦略 (evolutionary stable strategy) として理解する道を拓き、以来さまざまな動物の行動型が適応戦略として語られることとなった。人間のさまざまな在り様 (つまりは広い意味での人間の行動型) をこの延長上で考えてみようとするのにさほどの長い時間は必要としないだろう。亀田・村田は社会心理学のテキスト・ブックとして出版されたものだが、この最先端の視点を提示したものである。

それでは進化とスティグマはどう繋がるのだろうか。進化生物学の基底を成す原理が適応であり、進化生物学の基底も適応であるのだから、進化心理学においてスティグマを問題にすることは、当然、スティグマと適応との関連を問題にすることになる。

適応とは操作的水準で言えば適応度を高めることである。適応度を高めるとは、最も簡単に言ってしまうと子供を増やすことである。子供を増やす行動型が進化的に安定するであろうとされ、増やす可能性の低い

行動型は淘汰の道を進んで行くとされる。したがって、適応度を上げるような行動型が選択され、適応度を下げる行動型は排除されると考える。人類発祥時のその選択が、純粋に人間の精神の水準で行われていたとは考え難いのであるから、選択は自然選択であり、それによる適者が生存し続けるということになれば、現在繁栄している種は適種であり、現在普遍的に見られる行動型は進化的に安定している行動型であるということになる。現在の人間社会に広く一般的に見られる現象は、進化的に安定したシステムによるものであるということになる。進化心理学が言明するのは此処までであるが、ここには“進化的に安定している行動型は永い年月の自然選択 (natural selection) と性選択 (sex selection) を潜り抜けてきたもので、それが類としての人間の本来である”というニュアンスが強く出ている。人間が人間をスティグマ化する行動型もこの線上に位置づけられる。⁽¹³⁾ 明治初期の支配層に都合の良かった社会進化論の亡霊のようなものが、新しい衣装、いや銀色に輝く甲冑を纏って再出現して来たかのごとくである。

Crocker と Major は偏見、ステレオタイプ、差別などについての研究の集積から、“我々の社会 (アメリカ) では、いろいろなタイプの社会集団、いろいろなタイプの人間がスティグマ化されている”と述べて、一般に人々は次のようなカテゴリーの人々に否定的な固定観念を持っているという。彼女らが挙げるのは、黒人、女性、一般的な意味での魅力のない人、特に顔面がデフォルムした人、身体的に不能力の人、肥満の人、精神遅滞の人、同性愛の人、盲の人、精神病の人、そのような人々であると。更にこれらの人々が一般にアメリカ社会では経済機会や対人機会でさまざまな不利益を受けていることを述べている。彼女らは特に社会福祉政策との関連については言及していないが、福祉政策のクライエントが多く含まれるであろうことはすぐに読み

取れるだろう。このことと先の Kurzban, et al.⁽¹³⁾ の言説を併せると、これらのカテゴリーの人々が、多くの社会的交換の場から排除されるのは、類としての人間が進化論的時間をかけて獲得した認知的適応の結果だということになるが、これは status quo の容認にならないだろうか。そう捉えて容認することを naturalistic fallacy だと、言葉の上で切り捨てることは容易であるが、あらゆるイデオロギーの頂点に、科学イデオロギーが君臨する現代においては、様々な不当の根拠に科学が持ち出されるという、容易ならざる事態の到来も予想される。

自然科学が未来を語ることは出来ない。物的存在に未来という概念はありえないのだから、物的世界の真実を探る物質科学に未来の真実はありえない。生物科学も殆ど未来を語る事ができない。時間を未来へと展開する装置を殆どの生き物は持っていないのだから。つまり科学的真実とは常に歴史に無関の真実であり、自然科学が言葉の本当の意味で“未来”を語ることはない。自然科学者が未来を語るのとは、人間の未来を語っているのであって、科学的真実の未来の在り様を語っているのではない。進化論も現在に至る過去によって現在を語る自然科学である。したがって進化心理学が未来を語ることは出来ない。総ての人間が来るべき未来の真実を語るのに、未来を語ることの出来ない心理学、或いは社会心理学とは如何なるものであるか。

私はバリアフリーという美しい形容矛盾の言葉を生み出した人類のことを思う。このことが人間生活のさまざまな局面で実体を持っている時代の到来を思う。その時、それらの総ての局面に“選択、とりわけ自然選択”という言葉はないだろうと思っている。

[注と引用文献]

- (1) 中原 淳一：青年たちの「環境」等へのイメージについて，人文社会科学論集（帯広畜産大

- 学), 9巻, 3号, 181-224, 1996.
- (2) 中原 淳一: 青年達の「環境」関連概念についてのイメージとそれらが構成する階層クラスターについて, 人文社会科学論集 (帯広畜産大学), 9巻, 4号, 283-320, 1997.
- (3) 中原 淳一: 浮上してくる暴力 今日の人々の社会的性格としての擬似権威主義, 人文社会科学論集 (帯広畜産大学), 10巻, 2号, 1-34, 1999.
- (4) 中原 淳一: 滲出する暴力 内なる否定者の心理状況を源泉として, 北星論集 (北星学園大学社会福祉学部), 第39号, 21-35, 2002.
- (5) 森田 綾: 福祉と関連領域についてのイメージ調査, 北星学園大学社会福祉学部卒業論文, 北西学園大学, 2001.
- (6) Osgood, C. E. : The Cross-Cultural generality of Visual-Verbal Synes-thetic Tendencies., Bahav. Sci., 1960, 5, 146-169
- (7) オスグッド, C. E. : 情意的意味体系の一般性, (吉田正昭訳), 計量心理学リーディングス, 1968, 誠信書房
- (8) 小浜 逸郎: 「弱者」とはだれか, 1999. PHP 新書.
- (9) Goffman, E. : STIGMA-Notes on the Management of Spoiled Identity, Prentice-Hall, 1963.
- (10) virtual identity には, 代表的な記書 (スティグマの社会学 烙印を押されたアイデンティティ, 石黒毅訳) では対他的同一性, actual identity には即自的同一性と訳語がつけられているが, 適切でない様に思う。ここで Goffman は virtual を, 表現型を保証する実体がないのに他者に対して実効性を持っているという意味, actual を実効性とはかなくとしての事実性という意味で使っている筈で, じつはコンピュータ科学での virtual (仮想現実) という意味と同じであると私は理解している。Goffmann は, 現在では virtual のむしろ主要な意味になっている (仮想現実) を先取りして使っていたように思う。
- (11) ピンカー R. : 社会福祉学原論 (岡田・柏野 訳) 1985, 黎明書房
- (12) 亀田達也・村田光二: 社会心理学 適応エージェントとしての人間, 有斐閣アルマ, 2000.
- (13) Kurzban, R. & Leary, M. R. : Evolutionary Origin of Stigmatization-The Function of Exclusion-, Psychological Bulletin, Vol.127, 2001.
- (14) Baldock J. et al. (edit.) : Social Policy, Oxford Univ. Press, 1999.
- (15) Spicker, P. : Stigma and Social Welfare, Beckenham, 1984.
- (16) Page, R. M. : Stigma-Concepts in Social Policy-, Routledge & Kegan Paul, 1984.
- (17) Heatherton, T. F. et al. (edit.) : The Social Psychology of Stigma, The Guilford Press, 2000.
- (18) Crawford, C. & Krebs, D. L. (editors.) : Handbook of Evolutionary Psychology, Lawrence Erlbaum Associates, 1998.
- (19) Buss, D. M. & Kenrick, D. T. : Evolutionary Social Psychology, Chap. 37, Handbook of Social Psychology, Vol.2, 982-1026, 1998.
- (20) ウィルソン, E. O. : 社会生物学 (坂上他訳), 思索社, 1983.
- (21) メイナードスミス・スミス, J. : 進化とゲーム理論 - 闘争の論理 (寺本, 梯訳), 産業図書, 1985.
- (22) Crocker, J. & Major, B. : Social Stigma and Self-Esteem, Psychological Review, Vol.96, 1989

[参考文献]

- 1) Harman, H. H. : Modern factor Analysis, Chicago, University of Chicago Press, 1960
- 2) 田中 豊, 垂水 共之, 脇本 和晶: パソコン統計解析ハンドブック (多変量解析編), 1984, 共立出版
- 3) 奥野 忠一ほか: 続 多変量解析法, 1976, 日科技連出版
- 6) 田中 靖政: 記号行動論 意味の科学 (情報科学講座 C・12・3), 1967, 共立出版

[Abstract]

Image of Social Welfare : Being Negated When Being Praised

Junichi NAKAHARA

Images of several concepts in the area of Social welfare were measured by the Semantic Differential Method devised by Charles Osgood. Principal component analysis was carried out on the correlation data. The first component showed negation, which was interpreted as people's tacit rejection of the Social welfare area. Welfare clients were supposed to be looked down on and were excluded from many social exchange patterns because of their discredited identity or social stigma. The author criticizes the present abuse of the term "stigma" and also condemns a newly developing perspective of stigma. In this perspective, stigmatization was thought to be designed by natural selection as an adaptive social psychological system to solve problems associated with sociality.

